

+ 8 【おおくび】

それは真夜中のことでした。

どういうわけか眠れないので、縁側（えんがわ）からまんまるのお月さまを眺めていると、お月さまの近くに何やらまるいものがある。

お月さまは黄色いけれども、それは上半分白くて下半分赤い。

じっと眺めていると、だんだん近づいてくる気がします。

どうやら赤いのは口で、口がやけに大きい女の首でした。

眼の錯角（さっかく）かとおもって、何度もこすったけれども、やっぱり女の首で、よく見ると黒い髪の毛が無造作に生えています。

恐ろしいというよりも、どうしてこんなものが宙に浮いているのか、不思議でした。

そのうち、赤い口をかつとひらきます。

ぼくに、こわがれといってるかんじの開き方なので、ぼくはこわがりました。

でもこんな時間に懐爺のところへはいけません。

それはとにかく大きな首で、近づくとふつうの顔の百倍はあります。

月光に照らされてぬらぬらとひかる赤い口に、ぼくは呑み込まれるかとおもいました。

赤い口からはよだれが滴り落ちているのですから。

しかし【まるのみおんな】ではないのだから、そんなこともないだろうと、ぼくはこの大きな首に、【おおくび】と名付けました。

懐爺でもそういうだろうとおもいました。

【おおくび】はぼくの前で何かいいたそうにします。

きっと生前よほどひどい目にあっただけでしょう。

ほんとうにうらみがましい眼をしています。

そこでぼくから声をかけます。

そう恐ろしくかんじてはいないはずなのに、声がふるえます。

「おまえはだれじゃ」

【おおくび】はこたえます。

「あたしはあたし」

「あたしじゃわからん」

「あたしはあたしなの」

「ふん」

とぼくは鼻をならしました。

それからこうききました。

「どうしてわしのとこにでてきたんじゃ」

「だって、そろそろでしょ」

「なにがそろそろじゃ」

たしかにそろそろじゃわからない。

そろそろ死んでしまうのか、そろそろおばけになってしまうのか。

【おおくび】は妙な笑い声をたてます。

うおっほほとほと

まはまはまんまん

いっひいいんいん

あはあはあなあな

それから飛んで、お月さまのほうへ飛んで、消えてしまいました。

翌日懐爺にききました。

「それはたしかに【おおくび】ですね」

「あたったかのう。それであれはなんなんじゃ」

懐爺はじつにいいにくそうにしながら、

「まあいいでしょう。金ちゃんにもいずれはわかることです。【おおくび】

は女のあそこのおばけです」

「あそこたあなんじゃ」

「あそこはあそこです」

「【おおくび】とおんなじいいかたじゃのう」

「まあ、その、しかし、あの」

「はっきりせいや」

「こんどいいますね。今日はかんべんしてください」

「かんべんならんのう」

そういったけれども、いくらぼくだって、〈女のあそこ〉くらいは、ど
ういうものか解っていました。

ところでぼくが、おとなになっても女嫌いなのは、こどものころ【おおくび】を見てしまったからにちがいありません。